

日本中國學會報 第七十二集  
二〇二〇年十月十日 發行 拔刷

吉州本『近體樂府』考

東  
英  
寿

# 吉州本『近體樂府』考

## 一、問題の所在

北宋の歐陽脩（一〇〇七～一〇七二）は、詩、詞、散文等の數多くのジャンルにおいて優れた業績を残し、その作品の多くは南宋の周必大（一二二六～一二〇四）が編纂した『歐陽文忠公集』百五十三卷に収録されて今日まで流傳している。また、中國文學史においては、唐宋八大家の一人に數えられ、宋代の古文の復興に大きな功績があつたが、清後期に活躍した馮煦は『宋六十一家詞選』例言において、歐陽脩の詞を彼の散文における功績と比較して、次のように記述している。

宋至文忠、文始復古、天下翕然師尊之、風尚爲之一變。卽以詞言、亦疏隽開子瞻、深婉開少游。本傳云超然獨鶩、衆莫能及。獨其文乎哉。獨其文乎哉。

宋は文忠に至り、文は始めて古に復し、天下翕然として之を師尊し、風尚之が爲めに一變す。卽ち詞を以て言へば、亦た疏隽なるは子瞻を開き、深婉なるは少游を開く。本傳に云く超然として獨鶩なること、衆は能く及ぶこと莫しと。獨り其れ文のみならんや。

獨り其れ文のみならんや。

東 英 寿

歐陽脩によつて古文の復興が成し遂げられ、當時の文章の氣風が一變したことを評價すると同時に、彼の詞について、自由闊達さは蘇軾への道を開き、その奥深さは秦觀へ繋がると思はれ、馮煦は『宋史』卷三百十九、歐陽脩傳の「超然獨鶩、衆莫能及」という記述は、彼の文章について言っているだけではなく、詞にも當てはまるのではないかと、歐陽脩の詞について高く評價するのである。

宋代に編纂された歐陽脩の詞集としては、南宋の慶元二年（二一九六）に周必大が故郷・吉州で完成させた『歐陽文忠公集』百五十三卷に収録されている『近體樂府』三卷と、編纂者が不明で南宋後期の淳祐十年（一二五〇）以降に刊行された『醉翁琴趣外篇』六卷がある。<sup>①</sup>既に拙稿において考察した如く、『醉翁琴趣外篇』は福建地方で刊行された閩本で誤刻が多く、しかも編纂者が不明でその編纂も杜撰であり、歐陽脩の作ではない所謂僞作の詞も多數含まれているので、歐陽脩の詞を取り上げる際には注意する必要がある。一方、『近體樂府』は、周必大が編纂した『歐陽文忠公集』に収録されており、また『近

體樂府』の校正を擔當したのは、周必大が歐陽脩の全集を編纂した際の擔當者の一人である羅泌であることが明らかになっている<sup>3)</sup>。このように編纂時期や擔當者がはっきりとしているので、『近體樂府』に収録されている歐陽脩の詞は信頼性が高く、後に刊行された歐陽脩の詞集は、ほとんどの場合、『近體樂府』に依據し歐陽脩詞を採録している。

ところで、この『近體樂府』を考える際、これまでの研究においては吉州本『近體樂府』の存在が注目されていた。『近體樂府』は歐陽脩詞を考察するための基本的な文獻であり、とりわけ「吉州本」という冠がついた『近體樂府』は、歐陽脩や周必大の故郷である吉州で、慶元二年（一一九六）に刊行された周必大編纂の『歐陽文忠公集』に収録されたもので、今日まで傳承されてきた『近體樂府』の源流的存在とみなされている。このように吉州本『近體樂府』は重視されているにもかかわらず、後の明代や清代に編纂された四部叢刊本『近體樂府』や四庫全書本『近體樂府』と比べると、収録詞数が違っているのはなぜかという問題があり、またそもそも本當に慶元二年刊行の吉州本『近體樂府』の實物を確認できるのかということについても疑問が残っている。そこで本稿においては、吉州本『近體樂府』について、中國の國家圖書館での調査をもとに、それが一體どのような刊本であったのかを考察して、その實體を具體的に明らかにしたい。

## 二、從來の研究における吉州本『近體樂府』像

『近體樂府』三卷は周必大が慶元二年に編纂した『歐陽文忠公集』卷百三十一～卷百三十三に収録されており、卷百三十三の卷末部分に「郡人羅泌校正」という記載があるので、羅泌が校正を擔當していた

ことが明らかとなる。さらに、吉州本『近體樂府』を考える際に、たとえば南宋の中後期頃に編纂された陳振孫『直齋書錄解題』や、『宋史』藝文志には吉州本『近體樂府』という記載は見当たらないので、南宋當時、吉州本『近體樂府』は單獨で傳承していたわけではなく、あくまで慶元二年に吉州で周必大が編纂した『歐陽文忠公集』に収録されていたものと考えられている。

ここで、吉州本『近體樂府』に言及しているこれまでの研究を確認しておきたい。謝桃坊「歐陽脩詞集考」においては次のように記述する<sup>4)</sup>。

《近體樂府》目前常見的有收入《景刊宋金元明本詞》的《景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府》三卷、收入《四部叢刊》的元刊本《歐陽文忠公集》之《近體樂府》三卷、清乾隆二十四年（1759）歐陽安世等校刊的祠堂本《歐陽文忠公全集》卷一百三十一至一百三十三的《近體樂府》三卷。這三種、只吉州本多《漁家傲》十二首鼓子詞和續添《水調歌頭》一首……它們實際同出一源、通稱全集本。吉州本三卷、詞一百九十四首系出自慶元二年編訂的《歐陽文忠公集》卷一百三十一至一百三十三、故于詞集每卷之卷首下、均標明全集卷數。

《近體樂府》で現在よく見られるのは《景刊宋金元明本詞》に収録の《景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府》三卷、《四部叢刊》収録の元刊本《歐陽文忠公集》の《近體樂府》三卷、清の乾隆二十四年（1759）歐陽安世等校刊の祠堂本《歐陽文忠公全集》卷百三十一から百三十三の《近體樂府》三卷がある。この三種のうち、ただ吉州本のみが《漁家傲》十二首の鼓子詞と續添の《水調歌頭》

一首が多い……それらは實際、同じ一つの源、通稱全集本から出ている。吉州本三巻は、詞百九十四首で慶元二年編訂の《歐陽文忠公集》巻百三十一から百三十三より出ており、そのため詞集の毎巻の巻首の下に、均しく全集の巻数を明示している。

吉州本三巻は慶元二年に編纂され収録詞数は百九十四首であり、『四部叢刊』に収録されている『近體樂府』及び清・乾隆二十四年の歐陽安世等校刊の祠堂本『歐陽文忠公全集』に収録されている『近體樂府』に比べて、「漁家傲」十二首と「水調歌頭」一首の合計十三首が多く収録されていると述べる。

この吉州本『近體樂府』は、近人が編纂した歐陽脩詞集においてどのように把握されているのであろうか。たとえば、黃奮箋注『歐陽脩詞箋注』の前言では次の如く述べる。

歐陽脩詞版本較多（見後附版本考）、其中以吳昌綬雙照樓影印宋本《歐陽文忠公近體樂府》（此本是依照南宋寧宗慶元二年在吉州刊本景印的）較為精審。本集即以此本為底本、……

歐陽脩詞の版本はやや多く（後に附す版本考を参照）、その中で吳昌綬の雙照樓影印宋本《歐陽文忠公近體樂府》（この本は南宋寧宗の慶元二年の吉州での刊本の影印に依據しているのである）が比較的綿密で行き届いている。本集はこの本を底本とし、……

ここでは『近體樂府』として、吳昌綬の雙照樓影印宋本『歐陽文忠公近體樂府』に着目し、それが慶元二年に吉州で刊行されたものの影印で、周到で行き届いており底本としたと記述する。さらに、胡可

先、徐邁校注『歐陽脩詞校注』の前言においては<sup>6)</sup>、「歐陽文忠公近體樂府三巻、吳昌綬雙照樓影印宋吉州本、景刊宋金元明本詞、上海古籍出版社一九八九年影印本。（簡稱「吉州本」）として、吉州本『近體樂府』（簡稱「吉州本」）を取り上げ、校勘に用いたテキストの最初に記載する。

これらの記載において注目すべきは吳昌綬（一八六七～一九二四）という人物である。彼は清末から民國初期に活躍し、一九一一年から一九一七年にかけて宋代と元代の詞を集めて『仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞』を編纂しており、その中に『景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府』三巻として歐陽脩詞を収録した<sup>7)</sup>。それが吉州本『近體樂府』三巻であり、前述の黃奮、胡可先、徐邁氏らは歐陽脩詞を採録する際にこの吳昌綬本を使用していたことがわかる。ちなみに吳昌綬本には歐陽脩詞が百九十四首収録されている。

ところで、周必大が慶元二年に編纂したとされる原刻本『歐陽文忠公集』は、これまで中國の國家圖書館、天理大學附屬天理圖書館、宮内廳書陵部に所蔵されていると考えられてきた。しかし、拙稿での考察により、それらは全て原刻本ではなくて後の南宋時代の修訂本であり、周必大原刻本は中國の國家圖書館所蔵の鄧邦述跋『歐陽文忠公集』であることが明らかとなった<sup>8)</sup>。ただし、この鄧邦述跋本は、現在『歐陽文忠公集』巻二十～巻二十三部分の僅か四巻しか存在せず、巻百三十一～巻百三十三の『近體樂府』三巻部分は缺本である。一方、吉州本『近體樂府』は、周必大が慶元二年に故郷である吉州で編纂した原刻本『歐陽文忠公集』百五十三巻の巻百三十一～巻百三十三に収録されていると見なされているので、今日、慶元二年刊行の吉州本『近體樂府』を用いたとする論考においては、周必大原刻本である鄧

邦述跋本に缺けている『近體樂府』三卷を實際に確認できているのかという大きな疑問が残る。しかしながら、これまでの研究や近人が編纂した歐陽脩の詞集においては、當然の如く吉州本『近體樂府』が主要なテキストとして重視され用いられているのである。本稿では吉州本『近體樂府』の真相を明らかにする過程で、この疑問についても解明したい。

### 三、収録詞数の違いという謎

#### ——百八十一首と百九十四首——

吉州本『近體樂府』の収録詞数は百九十四首であるが、今日見ることのできる通行の四部叢刊や四庫全書、四部備要等の『歐陽文忠公集』に収録されている『近體樂府』三卷には、歐陽脩詞が百八十一首しか収録されていない。吉州本『近體樂府』は、四部叢刊所收『近體樂府』に比べて、卷二に「又漁家傲」として「漁家傲」詞が十二首多く、さらに卷三の「續添」部分に「水調歌頭」詞一首が収録され、合計で十三首多い。この収録詞数の違いについては、研究者も疑問を抱いていたようで、たとえば饒宗頤は『詞籍考』の中で次のように述べている。

宋槧歐陽文忠公全集一五三卷。前京師圖書館藏不全者三部、其第一部慶元二年吉州刊本、第一三一至一三三、近體樂府三卷俱全、十行十六字、首爲樂語、次長短句一百九十三首。中有「續添」「又續添」標識。

宋槧の歐陽文忠公全集一五三卷。前の京師圖書館に不全なる者を藏すこと三部、其の第二部は慶元二年吉州刊本にして、第一三一

より一三三に至る近體樂府三卷は俱全にして、十行十六字、首は樂語爲りて、次は長短句一百九十三首なり。中に「續添」、「又續添」の標識有り。

饒宗頤は、歐陽脩『近體樂府』として京師圖書館の所藏本に着目し、現存する三部のうちの一つが慶元二年に吉州で刊行されており、そこには百九十三首が収録され、その中に「續添」「又續添」の記載があると指摘する。

さらに、饒宗頤は『近體樂府』の版本として、續けて四部叢刊所收『近體樂府』を取り上げて次のように記述する。

四部叢刊初編影印元刊歐陽文忠公全集一五三卷、其一三一至一三三、近體樂府、大體同宋刊、但第二卷末少收京本時賢本事曲子之漁家傲十二首、校記亦微異。所謂元刊前藏涵芬樓（四部備要有排印全集本）實明刊也。

四部叢刊初編影印元刊歐陽文忠公全集一五三卷、其の一三一より一三三に至る近體樂府は、大體宋刊に同じ、但だ第二卷末に京本時賢本事曲子より收むる漁家傲十二首少なく、校記も亦た微かに異なるのみ。所謂元刊の前の涵芬樓（四部備要有排印全集本有り）に藏するは實は明刊なり。

ここで、四部叢刊所收『近體樂府』がおおよそ宋刊本と同じと饒宗頤が言うのは、南宋の慶元二年に刊行された吉州本『近體樂府』を念頭に置いた記述である。吉州本『近體樂府』は卷二卷末に『京本時賢本事曲子』より収録した「漁家傲」十二首<sup>①</sup>があり、それが存在しない

四部叢刊所收本は吉州本に比べて十二首少ないこと、さらに校記にも注目して吉州本と比べるとそれが少し異なっていると指摘する。ここから四部叢刊所收『近體樂府』が吉州本『近體樂府』と収録詞數が異なっているという謎について、彼は版本の違いに起因すると推測していたと思われる。

また、清末から民國にかけての藏書家である繆荃孫（二八四四～一九一九）は、吳昌綬の『仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞』に収録された吉州本『近體樂府』について、次のような跋文を作成している。

歐陽近體樂府三卷、在全集一百三十一之一百三十三、共二百零四閱。二卷有續添、有又續添、三卷有續添、二卷有金陵口口口跋、有朱松跋、三卷有羅泌跋。……是此本慶元二年刊於吉州、元明均有翻刻、此則祖本也。

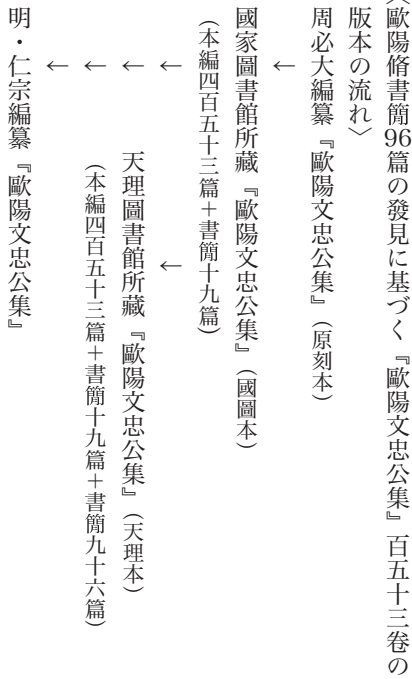
歐陽の近體樂府三卷は、全集の二百三十一より二百三十三に之（いた）るに在り、共に二百零四閱なり。二卷に續添有り、又續添有り、三卷に續添有り、二卷に金陵口口口の跋有り、朱松の跋有り、三卷に羅泌の跋有り。……是れ此の本は慶元二年に吉州に刊し、元明均しく翻刻有りて、此れ則ち祖本なり。

繆荃孫は収録詞數を二百零四閱（首）と記述するが、今日の『仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞』に収録されている吉州本『近體樂府』の詞數は十閱少ない百九十四閱であるので、この相違は繆荃孫の單純な計算ではないかと考えられる。また吉州本には卷二に「續添」、「又續添」、卷三に「續添」があると指摘するが、卷二の「續添」という記述は、實際は「又漁家傲」である。このように繆荃孫の記述はやや

正確さを缺く部分もあるが、彼は『仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞』に収録された吉州本『近體樂府』三卷こそが慶元二年に吉州で刊行されたものであり、「此則祖本也」として後に流傳してゆく『近體樂府』の祖本となつたと断定しているのである。

#### 四 周必大編纂『歐陽文忠公集』の版本について

吉州本『近體樂府』を考ふるに當つては、それが慶元二年に周必大が編纂した原刻本『歐陽文忠公集』に収録されているので、當然ながら周必大編纂の『歐陽文忠公集』百五十三卷の版本の傳承狀況を考察する必要がある。筆者は、歐陽脩の書簡九十六篇を發見した際の拙稿<sup>①</sup>において、周必大が編纂した『歐陽文忠公集』の版本の流れを考察した。それに基づき、版本の流れを簡潔にまとめると次のような圖となる。



〔本編四百七十二篇〕〔内譯・四百五十三篇十書簡十九篇〕

←

今日通行の『歐陽文忠公集』（四部叢刊、四庫全書收録等）

〔本編四百七十二篇〕〔内譯・四百五十三篇十書簡十九篇〕

これは『歐陽文忠公集』巻百四十四から巻百五十三に收録されている『書簡』十巻部分に着目したもので、慶元二年に周必大が編纂した原刻本『歐陽文忠公集』の『書簡』部分は今日見ることができないが、中國の國家圖書館所藏『歐陽文忠公集』（國圖本）に收録された『書簡』の本編には四百五十三篇の書簡が收録され、加えて『書簡』十巻のうち六巻部分の巻末に「續添」等の記載があり、そこには合計すると十九篇の書簡が付け加わっている。その國圖本の後に刊行された天理大學附屬天理圖書館所藏『歐陽文忠公集』（天理本）には國圖本の本編四百五十三篇と付け加えられた十九篇が存在し、さらに「續添」等の記載があつて新たに九十六篇が付け加わっている。後の明代になると第四代仁宗皇帝がまだ東宮であつた時、歐陽脩の全集を刻板させている。明の李紹は「重刊蘇文忠公全集序」の中で次のように記述する<sup>5)</sup>。

歐陽文惟歐所自選居士集、大蘇文惟呂東萊所編文選、與前數家竝行。然僅十中之一二、求其全集、則宋時刻本雖存、而藏于內閣、仁廟亦嘗命工翻刻、而歐集止以賜二三大臣。

歐陽の文は惟だ歐自ら選する所の居士集のみ、大蘇の文は惟だ呂東萊編する所の文選のみ、前の數家と竝び行はる。然れども僅に十中の一二のみにして、其の全集を求むれば、則ち宋時の刻本存

すと雖も、内閣に藏せられ、仁廟も亦た嘗て工に命じて翻刻せしむるも、而れども歐集は止だ以て二三の大臣に賜るのみ。

宋代から傳つてきた全集の版本（宋時刻本）が明代の内閣に所藏されており、それに基づいて仁宗が『歐陽文忠公集』を編纂させていたと記述する。當時、仁宗が編纂させた『歐陽文忠公集』はあまり流傳しなかつたようであるが、その系統の版本を確認すると本編には四百七十二篇の書簡が收録されている<sup>6)</sup>。それは國圖本の本編に收録されていた四百五十三篇の書簡と後から付け加えられた十九篇の書簡全てを本編に移動させて整理し編纂し直したため合計四百七十二篇になつたと言える。ここから明代の内閣に所藏され仁宗に基づいた版本（宋時刻本）は、現在の國家圖書館に所藏されている國圖本であつたことが明らかとなる。明代の仁宗が編纂させた、この『歐陽文忠公集』は決定版となり、以後の多くの歐陽脩の全集はこの明代版を踏襲することとなつた。そのため國圖本刊行の後に増補された書簡九十六篇（天理本に存在）は、完全に歐陽脩全集の傳承過程から外れてしまい、忘れ去られて今日に傳わることはなかつた。これが筆者の發見した歐陽脩書簡九十六篇である。

さて、今日見ることができるといふ四部叢刊、四庫全書、四部備要等に收録されている『歐陽文忠公集』百五十三巻は、いずれも宋代の國圖本の流れを汲む明・仁宗編纂本を藍本としており、注目すべきはそれらの『近體樂府』三巻部分には百八十一首が收録されているという点であり、一方吉州本『近體樂府』三巻に收録された詞は百九十四首である。これについて、國圖本、四部叢刊本、吉州本の收録詞數をまとめると表1のようになる。

〈表1〉	國圖本	四部叢刊本	吉州本
卷1	39	39	39
卷2	71	71	71
又續添	12	12	12
又漁家傲	なし	なし	12
卷3	59	59	59
續添	なし	なし	1
合計(収録詞數)	181	181	194

表1によると、卷一には、國圖本、四部叢刊本、吉州本ともに三十九首が収録されており、収録詞數は同じである。卷二の本編部分には國圖本、四部叢刊本、吉州本三本とも同じく七十一首が収録され、「又續添」部分にも同じく十二首が収録されている。その後、吉州本だけに「又漁家傲」という記載があり、十二首の「漁家傲」詞が収録されているが、それらは國圖本、四部叢刊本には存在しない。卷三については、本編部分には國圖本、四部叢刊本、吉州本三本とも同じく五十九首が収録されているが、その後、吉州本のみ「續添」という記載があつて「水調歌頭」一首が付け加わっている。これらから、宋代の國圖本や明代に刊行された四部叢刊所收『近體樂府』に比べて吉州本は収録詞數が十三首多いことがわかる。

この収録詞數の違いという謎を考ふるに当たつて、「續添」、「又續添」、「又漁家傲」という記載が重要な鍵を握つていゝと考えられる。この「續添」、「又續添」の記載については、拙稿「南宋刊本『歐陽文忠公集』の「續添」について——新發見の歐陽脩書簡九十六篇との関連——」で考察した通り、それらは後に増補された際に付け加えられた記述である。この「續添」、「又續添」部分については、『歐陽文忠公集』編纂の際に『近體樂府』部分の校正を擔當した羅泌が作成したと

指摘する研究もある<sup>18)</sup>。ただ、もし周必大の原刻本編纂に關つた羅泌が「續添」等を作成したとすると、「續添」や「又漁家傲」等の形式で、本編各卷の最後に作品を付け加えるような變則的な形式を採用せずに、それらの詞を本編に移動させて整理した形で全集を編纂するのではないかという素朴な疑問が残る。また、「續添」、「又續添」という記載は、『歐陽文忠公集』の『近體樂府』以外の他の箇所、たとえば『歐陽文忠公集』卷百四十四〜卷百五十三に収録された『書簡』十卷部分にも見られる。そして、この『書簡』十卷部分の「續添」、「又續添」等の記述の後に、これまで知られていなかった歐陽脩書簡九十六篇が存在したのであり、それらは拙稿で明らかにした如く周必大原刻本『歐陽文忠公集』の後に増補されたものであつた。このため『近體樂府』部分に見られる「續添」等の記述だけに基づいて、それを羅泌が個別に付け加えたとは断定するのは適切ではなく、それらむしろ『書簡』部分とも關連する、一連の増補であつたとして把握すべきであろう。

このように、國圖本や四部叢刊本に見られず、吉州本『近體樂府』だけに見られる、卷二の「又漁家傲」、卷三の「續添」部分は、周必大編纂の原刻本『歐陽文忠公集』の校正を擔當した羅泌が付け加えたのではなく、後に全集が増補された際に付け加えられた部分であると考えられるのである。とすれば、卷二に「又漁家傲」、卷三に「續添」部分がある吉州本『近體樂府』は、果たしてこれまで言われてきたように慶元二年に刊行され、後の『近體樂府』の祖本となつたと言えるのだろうか。



## 五 吉州本『近體樂府』の實像

〈表2〉	國圖本	四部叢刊本	吉州本	天理本
卷1	39	39	39	39
卷2	71	71	71	71
又續添	12	12	12	12
又漁家傲	なし	なし	12	12
卷3	59	59	59	59
續添	なし	なし	1	1
合計 (収録詞數)	181	181	194	194

『近體樂府』が収録されている『歐陽文忠公集』を考察する上で、今一つ重要な版本として天理本『歐陽文忠公集』があげられる。すでに拙稿で考察した如く、國圖本が朝廷に所藏され明の仁宗が決定版を編纂させた際に基づいた版本であつたのに對して、天理本は國圖本の後に増補されて刊行された版本であり、中國ではその完本は今日には傳承されていない。

天理本は、鎌倉時代に北條實時の使者が南宋に渡り購入した書籍の一つであり、それは金澤文庫に所藏され、その後伊藤仁齋家を經由して、現在天理大學附屬天理圖書館に所藏されている<sup>24)</sup>。

さて、この天理本に収録されている『近體樂府』を確認すると、そこには歐陽脩詞が百九十四首収録されている。ここで、國圖本、四部叢刊本、吉州本、天理本の『近體樂府』収録詞數をまとめると表2のようになる。これまでの考察により、吉州本『近體樂府』は、國圖本や四部叢刊本等の今日に流傳している『近體樂府』に比べて、収録詞數が十三首多かったが、天理本はその吉州本と同じ収録詞數であることが

確認できる。

清末から民國にかけての藏書家・陶湘（二八七一〜一九四〇）が、吳昌綬編纂の『仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞』に収録された吉州本『近體樂府』（『景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府』）について、次の如き案語を附している<sup>25)</sup>。

湘案京師圖書館所存內閣大庫書、歐陽公集宋刊殘本凡三部、存卷互有參差。其第二部存一百二十五之一百三十三、後三卷爲近體樂府。宣統間伯宛在圖書館時、景寫付刊後來諸本、皆發帙於此。湘、案ずるに、京師圖書館に存する所の內閣大庫の書にして、歐陽公集の宋刊殘本凡そ三部、存卷は互いに參差有り。其の第二部は一百二十五より一百三十三に之（いた）るを存し、後の三卷は近體樂府爲り。宣統の間に伯宛、圖書館に在りし時、景寫して後來の諸本を付刊するは、皆な帙を此に發す。

京師圖書館の內閣大庫に宋刊殘本『歐陽文忠公集』が全てで三部所藏されており存卷は互いに違いがあつて、その一つに『近體樂府』があり、清代の宣統年間に伯宛（吳昌綬の字）が圖書館で書寫し刊行したと陶湘は記述する。當時、吳昌綬は內閣中書の官にあつたので京師圖書館の資料を調査することができた。ここで、京師圖書館から繋がる現在の中國の國家圖書館に所藏されている『歐陽文忠公集』の宋刊本について、『北京圖書館古籍善本書目』で確認すると、次の十本があげられる（便宜上、①〜⑩の番號を振った）。

中國國家圖書館所藏宋版『歐陽文忠公集』

- ① 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 附錄五卷 宋慶元二年周必大刻本（卷三至六、三十八至四十四、六十一至六十三、九十五、一百三十四至一百四十三配明抄本） 四十六册
- ② 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 宋慶元二年周必大刻本（卷六十二至六十五配抄本） 十六册 存四十卷 四至七 五十五至六十七 七十二至七十三 八十七至八十九 一百十二至一百十七 一百二十至一百二十四 一百四十六 一百四十八 一百四十九至一百五十三
- ③ 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 宋慶元二年周必大刻本 三册 存五卷 五十二至五十四 九十六 一百十九
- ④ 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 年譜一卷 宋胡柯撰 宋刻本 二十一册 存七十二卷 二十至二十四 四十六至六十四 六十八至七十五 九十五至一百十四 一百十七至一百二十七 一百三十四至一百三十七 一百四十一至一百四十二 一百四十四至一百四十六
- ⑤ 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 宋刻本 二册 存四卷 八十二至八十五
- ⑥ 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 宋刻本 二册 存九卷 九十七至一百一 一百五十至一百五十三
- ⑦ 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 宋刻本（卷三十至三十四配清初抄本） 十六册 存五十卷 一至五十
- ⑧ 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 附錄五卷 宋刻本 二十册 存七十五卷 一至二 五十一至六十五 七十一至八十九 一百二至一百十八 一百二十五至一百四十三 附錄一

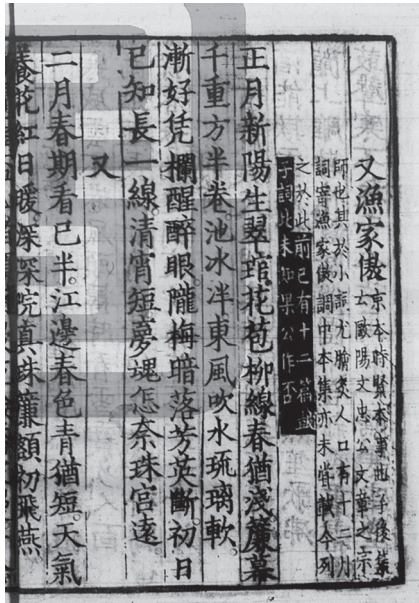
至三

- ⑨ 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 宋刻本 二册 存十一卷 四十至五十
- ⑩ 歐陽文忠公集一百五十三卷 宋歐陽修撰 宋刻本 鄧邦述跋 四册 存四卷 二十至二十三

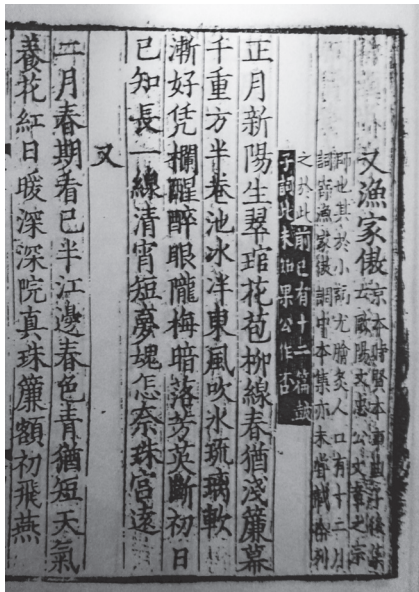
『北京圖書館古籍善本書目』では、①②③の『歐陽文忠公集』が慶元二年に刊行された周必大原刻本とみなされており、②は百五十三卷のうち四十卷、③は百五十三卷のうち五巻しか存在していないのに對して、①は百二十八巻現存しているので、國家圖書館所藏の『歐陽文忠公集』を代表する版本とされている（本稿で言う國圖本はこの刊本を指す）。なお②、③は、本稿で考察對象とする卷百三十一〜百三十三所收の『近體樂府』三巻は脱落している。

さて、ここで前述した陶湘の案語を想起したい。陶湘は、吉州本『近體樂府』である『景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府』が收録された『仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞』は、作者吳昌綬が當時の京師圖書館にある歐陽文忠公集の宋刊殘本から見つけ出したと述べていた。京師圖書館は現在の中國の國家圖書館に繋がるので、今日見られる前掲した①②⑩の宋版『歐陽文忠公集』を調査すると、⑧には卷百三十一〜卷百三十三の『近體樂府』が現存しており、その部分には天理本と同じく歐陽脩詞が百九十四首收録されているのが確認できた。すなわち、この本こそ吳昌綬が『歐陽文忠公集』の宋刊殘本の一つとして京師圖書館で直接見た刊本であると考えられる。ここで次頁に掲載する、この刊本と天理本とを比較する寫眞を確認したい。これら二枚の寫眞は、『近體樂府』卷二末に付け加えられた「又漁家傲」十二首の

⑧ 『歐陽文忠公集』 卷百三十二 (國家圖書館所藏)



天理本 『歐陽文忠公集』 卷百三十二 (天理圖書館所藏)



吉州本 『近體樂府』 考

冒頭の第一首、第二首部分であり、⑧ 『歐陽文忠公集』 は、匡郭や行数、行款等の版式が全く天理本と同じであることがわかる。一方、これら二枚の寫真に見られる『近體樂府』 卷二末の「又漁家傲」 第一首部分から第十二首までの全ては、宋刻本である國圖本や宮内廳本には存在せず、もちろん今日通行の四部叢刊本や四庫全書本等にも存在していない。つまり、⑧ 『歐陽文忠公集』 は、天理本と版式が同じで、他本には見られない「又漁家傲」 十二首が天理本と同じように付け加わっていることから、今日の天理本と同一系統であることが明らかになるのである。

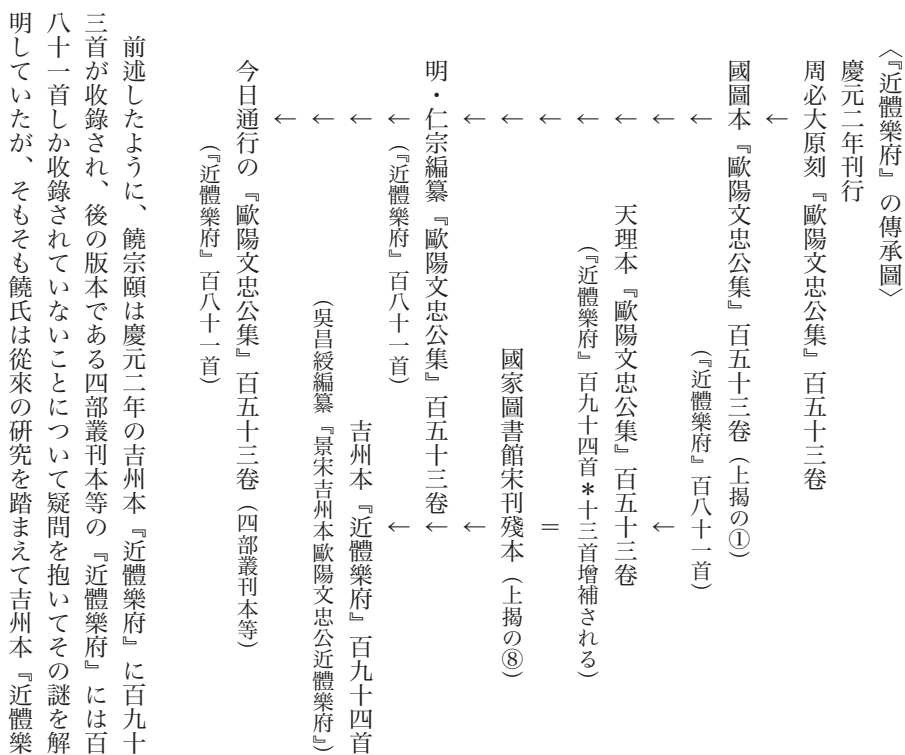
吉州本 『近體樂府』 は、吳昌綬が京師圖書館に所藏されていた宋刊殘本『歐陽文忠公集』 の中から見つけ出し編纂したもので、これまでの研究においては慶元二年に刊行されたものとして全く疑われることはなかった。ところが、収録詞數を手がかりに考察した結果、それは慶元二年に刊行された周必大原刻『歐陽文忠公集』 に収録された『近體樂府』 ではないことが明らかとなった。これまで吉州本『近體樂府』 と言われていたものは、この周必大原刻本の後に増補がなされた宋刻本、具體的には天理本系統の『歐陽文忠公集』 に収録されている『近體樂府』 だったのである。

六 まとめ

これまで研究者は、吉州本『近體樂府』 三卷を引用する際に、慶元二年の吉州本『近體樂府』 の實物を調査することはなく、直接には吳昌綬が宋代と元代の詞を集めて編纂した『仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞』 に収録されている『景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府』 三卷に依據して、それを慶元二年に刊行された吉州本『近體樂府』 として議論し

ていた。この吳昌綬の吉州本『近體樂府』は、彼が當時の京師圖書館に所藏されていた宋刊殘本の『歐陽文忠公集』の中から、慶元二年の周必大編纂『歐陽文忠公集』と認識していた刊本より採録し、『景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府』（吉州本『近體樂府』）として刊行したものであった。本稿において、吉州本『近體樂府』に收録されている詞數と今日通行の四部叢刊本『近體樂府』等の收録詞數の違いを手がかりとして、さらに版式を確認した結果、所謂吉州本『近體樂府』は、吳昌綬が言うような慶元二年刊行ではなく、後に増補されて刊行された天理本と同一であることが判明したのであった。<sup>(28)</sup> 吳昌綬が京師圖書館に存在していた宋刊殘本を慶元二年周必大編纂と誤認して吉州本『近體樂府』を編纂し、しかもそれは歐陽脩詞を考える際に極めて重要なテキストであったにもかかわらず、後の學者は實物を検討することなく直接にはただこの吳昌綬の編纂本を見て、吉州本『近體樂府』云々を論じていたことになる。従つて、前述した繆荃孫の吉州本『近體樂府』の跋文において、吉州本が慶元二年に吉州で刊行され、後の祖本になったと斷定するのは、それが全くの誤りであることも明らかとなる。

そもそも、吳昌綬が言う慶元二年の周必大編纂の原刻本『歐陽文忠公集』に收録されたとする吉州本『近體樂府』そのものは今日に傳承されていないので、實は見ることができない。なぜならば、慶元二年に周必大が編纂した原刻本『歐陽文忠公集』百五十三卷は、今日その一部しか見ることができず、卷百三十一〜卷百三十三に收録されている『近體樂府』三卷は缺本であり、残念ながら確認ができないからである。<sup>(29)</sup> これまでの考察を踏まえて、『近體樂府』の傳承をまとめると次のような圖になる。



府』が慶元二年に刊行されていたという前提で考察しているので、残念ながらその考證が誤りであったことも明らかになる。

なお、すでに見てきたように百九十四首が収録されている所謂吉州本『近體樂府』は、今日に傳承されている『歐陽文忠公集』収録の『近體樂府』に比べて、卷二の「又漁家傲」十二首と卷三の「續添」部分にある「水調歌頭」一首の合計十三首が多い。この十三首は、前掲の『近體樂府』傳承圖から明らかのように、現在通行の四部叢刊等の『歐陽文忠公集』に収録されなかつたので廣く知られない可能性もあつたが、十三首のうち「又漁家傲」十二首は、今日歐陽脩の作として傳承されてきた。それは唐圭璋が『全宋詞』にこの「又漁家傲」十二首を収録したからである。『全宋詞』を編纂した唐圭璋は、歐陽脩詞を採録する際に、『景刊宋金元明本詞』に収録された吳昌綬編纂『景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府』を用いていた。そのことは、『全宋詞』の引用書目の中に編纂に用いた諸本が掲載され、その中に「景刊宋元本詞六十一卷 近人吳昌綬編 雙照樓刊本」という記載があり、さらに『全宋詞』の歐陽脩「鷓鴣天」詞の後には、「以上歐陽文忠公近體樂府、用雙照樓景刊宋金元明本詞」と明記されていることから確認できる。唐圭璋がたとえば今日容易に見ることができるとも所収『歐陽文忠公集』に収録された『近體樂府』から歐陽脩詞を採録していたならば、「又漁家傲」十二首は『全宋詞』に収録されずに、廣く知られないままであつたかもしれない。なぜならば、前述した如くこの「又漁家傲」十二首は天理本系統本のみ収録されており、天理本は歐陽脩全集の傳承過程から外れていたもので、書簡九十六篇と同じくその存在が知られなかつた可能性があつたからである。しかし、吳昌綬が京師圖書館の宋刊殘本からそれらを偶然にも見つけ出し、そ

れを唐圭璋が『全宋詞』に採録したことにより、「又漁家傲」十二首が歐陽脩の詞として表舞臺に登場し、今日に傳わつたと見える。ただ、唐圭璋が『近體樂府』として吳昌綬編纂『景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府』を使用した理由は定かではないけれども、これまでの學者がそうであつたように、それが慶元二年に吉州で刊行された吉州本『近體樂府』であり、最も信頼できる刊本とみなしていた可能性が考えられる。結果として『全宋詞』によつて「又漁家傲」十二首は埋没せず廣く今日に傳わつたのである。

これまで歐陽脩詞を研究する際にしばしば引用され、重視されてきた吉州本『近體樂府』とは、當時の京師圖書館にあつた宋刊殘本『歐陽文忠公集』（吳昌綬が周必大原刻本『歐陽文忠公集』と誤認していたもの）に収録されていた『近體樂府』なのであり、それは從來の研究において認識されていた慶元二年に吉州で刊行された周必大原刻本『歐陽文忠公集』収録の『近體樂府』ではなく、その後の南宋時代に十三首が増補された宋刻本なのであり、従つて『近體樂府』の源流でもなく、それはすなわち現在の天理本『歐陽文忠公集』に収録されている『近體樂府』と同一だつたのである。

#### 注

(一) 歐陽脩の詞集としては、その他に宋代に『平山集』があつたと考えられる。『近體樂府』卷三末の羅泌の跋に「公性至剛而與物有情。蓋嘗致意於詩、爲之本義、溫柔寬厚、所得深矣。吟詠之餘、溢爲歌詞、有平山集盛傳於世、曾慥雅詞不盡收也」と記述することからそれがわかる。ただ『平山集』そのものは今日見ることができず、羅泌の跋から南宋時代に編纂された詞のアンソロジーである曾慥の『樂府雅詞』にも一部しか

収録されていないことが窺え、當時から完本は傳承されていなかったと考えられる。

- (2) 拙稿「歐陽脩『醉翁琴趣外篇』の成立過程について」(『風絮』第二號、二〇〇六年) 参照。
- (3) 後述するように、『歐陽文忠公集』卷百三十三収録の『近體樂府』卷三の卷末部分に「郡人羅泌校正」という記載がある。
- (4) 『文獻』一九八六年二期、一九八六年。
- (5) 中華書局、一九八六年。
- (6) 上海古籍出版社、二〇一五年。
- (7) 吳昌綬『仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞』と當時の藏書家・陶湘(一八七〇—一九四〇)の『武進陶氏涉園續刊景宋金元明本詞』及び『校錄』、『補編』を合わせて『景刊宋金元明本詞』と言ひ、本稿では吉州本『近體樂府』(『景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府』)三卷は、『景刊宋金元明本詞』(上海古籍出版社、一九八九年)に収録された『仁和吳氏雙照樓景刊宋元本詞』を用いた。以下同じ。
- (8) これまで周必大原刻本と言われてきたものがそうでないこと及び周必大の原刻本は鄧邦述跋本であることについては、二〇一一年に發表した拙稿「周必大原刻本『歐陽文忠公集』百五十三卷について」(『中國文學論集』第四十號)参照。なお、注(6)の二〇一五年に上海古籍出版社から刊行された胡可先、徐邁校注『歐陽修詞校注』の前言においても、「按、現存較為完整的歐陽文忠公集諸宋本、各藏書機構多著錄爲周必大慶元二年吉州刻本、然據我們觀察、這些藏本應均爲周必大紹熙至慶元年間刻本之遞修本、非周氏原刻。」として、先行の目錄等で慶元二年刊行の周必大原刻本と見なされているものは周必大原刻本ではないと記述し、拙稿と同一の見解を提出する。
- (9) 饒宗頤『詞籍考』(香港大學出版社、一九六三年)三十八頁の記述。
- (10) 『景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府』には「又漁家傲」として「漁家傲」詞が十二首多く、さらに卷三の「續添」部分に「水調歌頭」詞一首が収録され、合計十三首多い。しかし、「水調歌頭」は、すでにその校勘に「此詞載蘭畹集第五卷」として曾幾との互見が指摘されており、歐陽脩詞ではない可能性が高い。そのため、饒宗頤は考證において「水調歌頭」に全く言及していないのではないかと思われる。よつて、彼は吉州本『近體樂府』に収録されている歐陽脩詞としては百九十三首とみなしていたと考えられる。
- (11) 注(9)饒宗頤『詞籍考』三十九頁の記述。
- (12) 吉州本『近體樂府』には、この「又漁家傲」という詞題の下に、「京本時賢本事曲子後集云、歐陽文忠公、文章之宗師也。其於小詞、尤膾炙人口。有十二月詞、寄漁家傲調中、本集亦未嘗載、今列之於此。前已有十二篇鼓子詞、此未知果公作否」という注記があるので、饒宗頤はこれに基づいて「漁家傲」十二首を『京本時賢本事曲子』(『京本時賢本事曲子後集』)より収録したと記述したと思われる。
- (13) 繆荃孫の跋文は注(7)『景刊宋金元明本詞』所收の「景宋金元明本詞校錄」の「景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府三卷」部分に収録されている

ので本稿ではそれを用いた。

- (14) 拙稿「歐陽脩の書簡九十六篇の発見について」(『日本中國學會報』第六十四集、二〇一二年)参照。なお、論述の都合上、本節の論證は拙稿と一部重複している部分がある。

- (15) 「重刊蘇文忠公全集序」は、楊家駱編『蘇東坡全集』(世界書局、一九七四年)に収録されているので本稿ではそれを用いた。また、明の楊士奇も「恭題賜本歐陽文忠公集後」(『東里續集』卷十六收録)において、仁宗が歐陽脩の文章を愛していたので全集を刻版させたことについて「尤愛文忠議論切直、文章淳雅、遂命刻之板成」と記述する。

- (16) 明の仁宗が編纂させた『歐陽文忠公集』の系統として、たとえば弘治五年(一四九二)刊行の靜嘉堂文庫所藏『歐陽文忠公集』があげられ、それを確認すると本編には確かに四百七十二篇が収録されている。注(14)拙稿参照。

- (17) 拙稿「南宋刊本『歐陽文忠公集』の「續添」について―新発見の歐陽脩書簡九十六篇との関連―」(『日本宋代文學學會報』第五集、二〇一八年)。なお、「又漁家傲」という記載については、「又續添」の後に位置しているので、再び「又續添」と記述せずに「又漁家傲」と記述したのではないかと思われるが、いずれにせよ後に増補された部分である。

- (18) たとえば、劉雙琴氏は『六一詞接受史研究』(中山大學出版社、二〇一一年)三百二十頁において、「從羅泌續添的詞作看」と記述しており、羅泌が「續添」を作成したとみなしていることがわかる。また、歐陽明亮氏の「南宋周必大刻本《歐陽文忠公近體樂府》略考」(『周必大與南宋文化暨紀念周必大誕辰88周年』國際學術研討會論文集)、二〇一五年)では、「又漁家傲」十二首について「當是原本不見于《平山集》的作品、羅泌將其編入」として、羅泌が編入したと記述している。

- (19) 注(14)拙稿参照。

- (20) 注(14)拙稿参照。

- (21) 拙稿「歐陽文忠公集」の編纂と日本への傳來について―歐陽脩新発見書簡九十六篇を手がかりとして―」(『中國文學論集』第四十五號、二〇一六年)参照。

- (22) 陶湘の案語は、注(7)『景刊宋金元明本詞』所收の「景宋金元明本詞跋録」の「景宋吉州本歐陽文忠公近體樂府三卷」部分に収録されているので本稿ではそれを用いた。

- (23) 『北京圖書館古籍善本書目』(書目文獻出版社、一九八七年)。なお、本書目において①、⑤、⑧には版式の記載もあるが、本稿においてはその記載を省略した。

- (24) 『北京圖書館古籍善本書目』において、國圖本を含む①③の『歐陽文忠公集』を慶元二年に周必大が編纂した原刻本とみなしていることの誤りについては、注(8)拙稿で詳述した。

- (25) 陶湘は、吳昌綬が當時京師圖書館にあつた「歐陽公集宋刊殘本」三部の中から吉州本を見つけ出したと記述していたが、今日の國家圖書館には宋刊本として『歐陽文忠公集』が十部現存している。おそらく、その當時はまだ整理が行き届いていなかったため、三本しか確認できなかったのではないかと考えられる。

- (26) 二〇一九年八月に北京にある國家圖書館に行き⑧「歐陽文忠公集一百五十三卷」の卷百三十一〜卷百三十三に収録されている『近體樂府』を調査し、そこには天理本と同じく歐陽脩の詞が百九十四首収録されているのを確認した。ただこの本は卷百四十四〜卷百五十三の「書簡」部分が缺本なので、筆者が注(14)の拙稿で報告した、天理本にあつた新発見の歐陽脩書簡九十六篇は存在していない。また、注(14)の拙稿において、九十六篇の書簡の一部が存在していると指摘した、中國の國家圖書館所藏の天理本系統の宋刻本は⑥であるが、この⑥は卷百三十一〜百三

十三の『近體樂府』三卷は缺本であつて存在していない。なお、中國の國家圖書館に所藏されている十本の宋刻本『歐陽文忠公集』の系統や特色については、別稿を用意している。

(27) なお、天理本『近體樂府』卷三の「續添」部分にある「水調歌頭」一首についても、⑧『歐陽文忠公集』に存在しており、その部分の版式も天理本と同一である。

(28) 歐陽明亮『歐陽脩詞校箋』（中華書局、二〇一九年）前言では、中國の國家圖書館所藏①「歐陽文忠公集一百五十三卷」（國圖本）を周必大が慶元二年に刊行した原刻本と見なした上で、吉州本『近體樂府』と天理本はその慶元二年本の續修本とし、「其中吉州本與天理本在慶元本的基础上增補詞作十三首」と記載する。吉州本『近體樂府』を慶元二年刊行ではないと認定するのは本稿と同じであるが、この記述からは吉州本と天理本は全くの別物であると見なしていることがわかり、それらが同一であることは想定されず、しかも考證の前提となる國家圖書館所藏①「歐陽文忠公集一百五十三卷」を、これまでの研究と同じく何の疑いもなく慶元二年刊行の周必大原刻本と見なして論證しているので、歐陽明亮氏の論證は説得力を缺くと言える。

(29) 周必大の原刻本は、注(8)拙稿で考察したように鄧邦述跋本であると考えられる。前掲した『北京圖書館古籍善本書目』の國家圖書館所藏宋版『歐陽文忠公集』の⑩である。なお該書は僅かに四卷しか現存せず『近體樂府』三卷は缺本であるので確認出来ない。

(30) 唐圭璋は、注(9)の饒宗頤と同じく、互見の問題から「水調歌頭」を歐陽脩とみなしていないため『全宋詞』には歐陽脩詞として十三首のうち「漁家傲」詞十二首のみを収録したと考えられる。

(31) 唐圭璋『全宋詞』（中華書局、一九八〇年）十七頁、引用書目参照。

(32) 注(31)唐圭璋『全宋詞』百四十八頁の記述。

(33) 天理本にのみ収録されていた歐陽脩の書簡九十六篇は注(14)拙稿で明らかにする以前は、今日に全く知られていなかった。この「又漁家傲」十二首も、書簡九十六篇と同じく天理本系統のみに収録されていることになるので、唐圭璋の『全宋詞』がなければ、今日まで傳承されていない可能性もあつたと考えられる。

(附記) 本研究は、JSPS 科學研究費 18H100651 の助成を受けたものである。